

AFC Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

6

2018

特集 日本農業は人手不足時代



日本農業は人手不足時代

3 優秀な農業人材の採用と育成が急務になる

納口 るり子

日本農業で存在感を高める大規模農業経営体の多くは雇用型で、発展には人的資源整備が必要だ。そこで人材に関する経営課題を浮き彫りにしてみよう

7 外国人労働をめぐる農業生産構造の現実

石田 一喜

労働力として外国人を活用する議論が高まる中、さまざまな課題が浮かぶ。ここでは新たな技能実習制度と特区での外国人受け入れを検証する

11 私が理想とする農業と外国人労働のかたち

澤浦 彰治

外国人と日本人が補完しあう仕組みを作れば農業法人だけでなく地域に活力をもたらすと主張する筆者が外国人材活用の理想を語る

もう一つの農業雇用

25 小暮郁夫さんの実践に学ぶ

農業の「職場」を創る

人材の「雇用と育成」のソリューション

株式会社関東地区昔がえりの会

情報戦略レポート

15 農業景況DIは2年連続で過去最高値 GAPは認知者3割が認証を取得意向

—2017年下半年 農業景況調査—

経営紹介

経営紹介

23 株式会社オキス／鹿児島県

岡本 孝志

運送コスト削減と付加価値の向上のため乾燥野菜に着目した。商品は商談会で高く評価され、物流構築ノウハウも武器にして、大消費地・東京やアジアへと販路を拡大

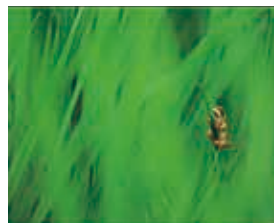
変革は人にあり

29 有限会社赤松牧場／香川県

赤松 省一

乳牛の飼養頭数増加から加工部門の進出で業容の拡大を図り、地域耕種農家との耕畜連携をする。酪農家は、都市型酪農経営を目指すとする

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影：重田 吉晴

千葉県富津市
2012年6月撮影

アマガエル、稲で天を仰ぐ

■稲にひしと抱きつくアマガエル。それでも稲は倒れない。広がる青田は、細いが強い稲の集合体だ■

シリーズ・その他

観天望気

ジェロントロジーと農業 寺島 実郎 2

農と食の邂逅

関 美絵子／兵庫県

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

私の最善の食事 澤口 俊之 22

耳よりな話 194回

開発に20年を要したキャベツ収穫機

吉岡 宏 28

書 評

西川 芳昭 著

『種子が消えればあなたも消える 共有か独占か』

宇根 豊 32

インフォメーション

交叉点 日本食市場の動向 in タイランド 33

既成概念を超える女性経営者の発想力

札幌支店 35

メロン農家に学ぶ直販マーケティング

秋田支店 35

若手農業者の新たな交流の場に

高松支店 35

金融機関が連携し六次化促進の展示会

岡山支店 35

『事業性評価融資』のご案内 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第13回アグリフードEXPO東京2018 38

7月号予告

特集は「[運べない]危機、どうする農業界」を予定。

昨今、運送業界では人手不足による値上げが顕著だが、物流問題はコストアップの要因となるほか、出荷できない事態に発展する可能性が出てきた。迫る物流危機に対し、解決の糸口を探る。

観天 望気

ジェロントロジーと農業

戦後日本は、食料は田舎がつくって都市はそれを買って食べるもの、さらには国際分業論に基づき、鉄鋼・エレクトロニクス・自動車で外貨を稼ぎ、食料とエネルギーは海外から買うことが合理的だという国をつくり、一定の豊かさを実現した。産業構造の変化に対応するため、高度経済成長期には東京をはじめとした都市を取り巻くように、数多くの巨大団地、ニュータウン、マンション群が建てられ、都市近郊に人口を集約させた。

その代償として失ったのが、食料自給率三八％に象徴されるように「食の安定」である。同時に、高度経済成長期を支え、都市近郊に居を構えた団塊世代は高齢者となった。所属する組織をリタイアした後、社会参画の機会が少ないことに起因するさまざまな問題も現実には起きている。

異次元の高齢化社会に突入した日本では、二〇一七年に六五歳以上人口は三五〇〇万人、八〇歳以上人口は一〇〇〇万人を超えた。「高齢化」と言っても、「田舎の高齢化」と「都会の高齢化」はまるで違う。都会とは違い、田舎には生活の至近距離に農業があり、潜在的に社会参画の機会が数多く眠っている。

興味深い話がある。横浜の団地に住む高齢者たちが組織をつくり、長野でリンゴを育てる取り組みを行っている。現役時代に経理の仕事をしていた人は経理を、商社マンはマーケティングを担当するなど、それぞれの得意分野で活動してきた結果、大変多くのリンゴが穫れるようになっただけでなく、リンゴジュースやジャムの製造まで始めるなど、ビジネスの展開が本格化してきており、参画しているメンバーの充実感や満足感は大変に大きい。かつてはニュータウンと呼ばれた地域に住む高齢者層を活かしきる社会システムのひとつとして、一次産業としての農業が一つの鍵であることを示している。

失った「食と農」を取り戻し戦後日本のパラダイム転換を図るためには、蓄積した技術や人的資源、つまりは多くの高齢者が参画できるプラットフォームをつくるジェロントロジー（高齢化社会学）が、今後の日本を考える上で重要となるだろう。



一般財団法人日本総合研究所 会長

寺島 実郎

てらしま じつろう

1947年北海道生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了後、三井物産株式会社入社。その後、米国三井物産ワシントン事務所所長、三井物産戦略研究所所長、三井物産常務執行役員を歴任。現在は多摩大学学長も務める。また、「報道ライブ インサイドOUT 寺島実郎の未来先見塾～週刊寺島文庫～」(BS11、毎週金曜日夜20:59～)に出演中。

再建は平飼い鶏舎の卵
取引先からの注文に
再起を待ってくれていた、と
うれし涙が
ドオーツとあふれました

農と食
の邂逅

関 美絵子 さん

兵庫県丹波市
株式会社芦田ポトリ

物価の優等生と言われ、戦後日本人の健康面からも支えてきた貴重な食材の卵。有機食材を扱うバイヤーから養鶏農家へ転職。六次産業化へ取り組み方向にも心が動いた。食を通じて日本の未来を考えられるような仕事を目指す。





p19: 芦田昭也さんと関美絵子さん p20: 抱く鶏は、卵も肉もおいしい卵肉兼用品種「岡崎おうはん」。岡崎おうはんの肉を使ったソーセージも製造・販売する(右) ポストハーベストフリー、非遺伝子組換のトウモロコシや大豆粕が主原料の安全な餌で育つ鶏たち(左上) こちらの品種は「ポリスブラウン」(左下右) 鶏ふん、コーヒー粕、山の腐葉土からなる堆肥の販売も広げたいという美絵子さん(左下左)

入社直後の惨事を乗り越え

二〇一四年八月、福知山市から丹波市に及ぶ一帯を豪雨が襲った。芦田ポーターでは、約四〇〇〇羽の鶏が飼われていた全ての平飼い鶏舎が浸水する惨事に見舞われた。

止まり木に避難していた鶏を何とか救出しようとしたが、困難を極めた。それでも代表取締役社長の芦田昭也さん(五五歳)と従業員は、鶏舎に入った。鶏にこびりついた泥はなかなか落ちず、見る見るうちに弱っていく。芦田さんは弱った鶏たちの首を絞めるといふ苦渋の決断を下した。元氣な鶏たちを一輪車に乗せ、崩れかけた橋を渡っては、運び出す作業を繰り返した。

入社してわずか一カ月たったばかりの関美絵子さん(四五歳)にとって経験のないことばかりだった。「社長が『行くで』と前しか向いていなかったたので、ついていくしかないと思いました」と振り返る。

一週間後、家畜衛生保健所(家保)が救援に訪れた。トータル一〇日間かけて鶏たちを別の鶏舎へ移動させた。「防護服を着た家保の人たちを見た瞬間、ほっとして泣けてきた。でも、この経験が私を強くしてくれました」

芦田ポーターは約六〇年続く卵の卸業者だ。かつて丹波地方には、一〇〇〜三〇〇羽を平飼いし、自家配合の餌を与える養鶏農家が点在していた。健康に育った鶏の卵を求める消費者団体と養鶏農家を取り次いだ。

しかし、時代の流れには逆らえず、離農す

る養鶏農家が一つ、二つと増えていった。そうした農家から「養鶏を引き継いでほしい」と芦田さんは頼まれた。一九九〇年、二八歳のときに一念発起して養鶏業を営むことにした。すると次々と同様の依頼が舞い込み、平飼い四〇〇〇羽、ゲージ飼い一万羽という規模になった。やがて、自社で生産した卵を全て自社で販売する仕組みが完成した。

二〇〇七年以降の飼料高騰に危機感を覚えた芦田さんは、経営の安定を目指し、六次産業化にかじを切る。自前の施設を建て、卵を使ったプリンなどさまざまな加工品を生み出した。一三年、六次産業化・地産地消法に基づく「総合化事業計画」の認定を受けた。豪雨の被害を受けたのは、加工施設の増設および直売所の建設を進めようとした直後だ。

地域の魅力が伝わる加工品を開発

美絵子さんは有機食材を扱う流通業者のバイヤーだった。芦田ポーターは取引先の一つだ。「六次産業化に本格的に取り組み」と芦田さんから聞いた美絵子さんは六次化への興味もあり、自ら入社を志願した。

しかし、豪雨の被害で事態は急変した。被災した鶏舎は解体することになり、再建に資金を集中することに。加工施設増設の計画は中断せざるを得なくなった。

平飼いの新鶏舎を建てるための敷地は前よりも狭く、飼養羽数は四分の一になった。しかもひなが育ち、卵を産むまでの間、ゲージ飼いの鶏の卵しか出荷できない。出荷量が少



「卵のこと、丹波のこと、農業をどう伝えていくかで頭がいっぱい」と言う美絵子さん(上) スタッフは総勢10人。アイドルでもある山羊のメイは皆に可愛いがられている(下)

ない間、収益を別方法で確保することが不可欠だった。芦田さんと相談しながら美絵子さんは卵のブランド化を図り加工品も見直した。

同社の平飼卵は、運動場付きの開放鶏舎でのんびりと健康的に育てられている。その割にゲージ飼いの卵との価格差はわずか

だった。そこで平飼卵には『幸世村の平飼卵』という名前を付け、販売価格を見直した。幸世村とは事務所のある氷上町を含む地域の旧村名。「社長が口癖のように、地域でお世話になった人々に恩返ししたい、と言うのです。それならばと、かつての村名を冠することになりました」。飼養羽数が減った分、一羽

ずつにより手をかけられるようになることを伝え、取引先との値上げ交渉をしたところ、ほぼ納得してもらえた。

加工品も全面的に見直した。氷上町を含む丹波地方には、有機農業に取り組む生産者が多く、良い素材のものが多くある。この魅力を活かさない手はない。プリンには自社平飼いの卵に加え、低温殺菌のノンホモジナイズ牛乳を使い、試作を繰り返しながら滑らかな食感のプリンに仕上げた。卵とこの牛乳はシフォンケーキにも使われる。プレーン味だけでなく、丹波産黒豆から作ったきなこを混ぜた「黒豆きなこ味」も商品化した。

二〇一五年、ついに再建した平飼卵鶏舎で育った鶏の卵の出荷を再開する。主要取引先の一つで、産直の野菜、果物などを宅配する関西よつば連絡会のパンフレットの第一面に大きく、芦田ポートリーの卵と加工品が紹介された。「ものすごいペースで注文が来ました。中でもシフォンケーキは一週間で八〇〇個。再起を待っていてくれたのかと思うと、目からドオーツと(涙が)こぼれました」と目を潤ませる。

私が理解し、食べる人に伝えたい

以前は、テレビ番組のネタを探したり、基礎調査をしたりするリサーチャーとして活躍した美絵子さん。とりわけ、興味を持ったのは食材のリサーチャーだった。文献を調べ、電話で生産者と話すうち、「作り手と話してできる時間がものすごく楽しい」と感じた。

リサーチャーの仕事から離れた後も、食や作り手に対する思いは募り、「食を通じ、日本の未来を考えられる仕事に就きたい」と思った。それと同時に「二次産業のことを知りたい」との思いが強まり、バイヤーの道を選んだ。取引のある産地を訪ね、生産者と頻繁に情報交換をした。農業、農村が持つ魅力を感じ、より詳しく知りたいと思った。

「バイヤー時代、プリンを作ったという芦田さんに、原価や希望販売価格を尋ねると『分かん』と言われて驚きました(笑)。大事なことのだけども…。それでも作ることが好きで、まず作ってしまうのも農家さんらしいところです」

興味を持ったことを看過せず、自ら動いて理解を深めていく。美絵子さんは驚くほどの行動力を持っている。

「もし、私が農業や農家のことをもっと深く理解できれば、消費者に魅力をしっかりと伝えることができる――。六次化への興味もさることながら、この強い想いを胸に生産現場に飛び込んだ。

入社して約四年。鶏舎の管理、加工品作りなど現場を経験し、今は、加工品の飲食店への売り込み、経営管理などの仕事を主に行っている。芦田さんも「よう頑張ってる」と目を細める。さまざまなキャリアを積んだ美絵子さんに、生産現場に根を生やすつもりかどうか聞いた。「私がここにいる意味がある以上やり続けます」と答えてくれた。

(青山浩子／文、河野千年／撮影)

脳は人生に深く関わる臓器です。脳の働きが良ければ身体も健康で、社会的に成功し、長生きもできます。

それほど重要な脳の重さをご存じでしょうか？ 一・二―一・三^キ로그램ほどで、体重の約二％にすぎません。それにもかかわらず、全血液の二〇％が脳を巡っています。

脳にこんなにも血液が流れている理由は、酸素と栄養が常に必要だからです。そのせいもあって、食生活は脳にとっても強い影響を及ぼします。良い食生活によって脳の働きが良くなるのは当然ですが、高齢者においては脳の老化を遅らせることができます。認知症予防の「要」も、良い食生活です。

では、どんな食生活が脳にとって良いのでしょうか？ 膨大な科学的データがありますが、答えはごくシンプルです。それは、好きなように食べる、ということです。

「〇〇は脳に良い」「××は脳に悪い」といったことを話すのは脳科学者の私としては容易ですし、詳細に書けば一冊の本になるほどのです。ただ、ここであえてそんな話をしないのは、脳の働きが良好ならば食生活も良く、食生活が良好なら脳も良い、という関係があるからです。

良好な脳は「自分」のことをよく知っているのです。そのため、その時々自分の状態に合ったものを適切に食べるようにできています。そうした脳には、詳細な科学的データなど不要です。「良くない脳」には正しいデータを伝えるべきでしょうが、そんな脳には何を言っても無駄なことが分かっています。

私は仕事柄、脳が良好と思える人にたくさん会ってきました。その方々は雑多なフエイク情報(多い!)に惑わされることもなく、好きなように食べています。

かく言う私は、やはり、好きなように食べています。ただ、「幼少期の食生活が成人以降の食生活に多大な影響を与える」という科学的データ通り、子どもの頃によく食べていた「駄菓子(失礼な言い方だと私には思っていますが...)」を今でも多食しています。私の頭の悪さはそのせいかもしれません。いえ、駄菓子だって良い栄養素の宝庫なので、そのせいではないと思いたいです。



人間性脳科学研究所 所長
武蔵野学院大学・大学院 教授

澤口 俊之

さわぐち としゆき
1959年東京都生まれ。脳科学者。高次脳機能の研究に長年従事し、近年は幅広い年齢層の脳育成を目指す「脳育成学」を創設・発展させている。脳に関する著書多数。フジテレビ「ホンマでっか!? TV」、NHK「所さん!大変ですよ」など、TV番組にも出演。

私の最善の食事

開発に20年を要したキャベツ収穫機

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

吉岡 宏

稲

の栽培では収穫機による機械収穫が一般的ですが、野菜ではタマネギやニンジンなど根菜類の一部で機械収穫が行われている程度で、キャベツなどの葉菜類の多くは人力によって収穫されています。

稲作の機械化は高度経済成長に合わせて一九七〇年代後半に急速に進みましたが、野菜作では種類が多く、しかも地域によって畝の形状などの栽培様式が異なり、機械化がほとんど進んでいませんでした。その一方で、野菜の栽培面積は八〇年頃から農家の高齢化などにより急速に減少し、安定した供給が危ぶまれる状況にありました。

当時、農業用機械の開発は民間主導で行うこととなっていました。野菜作用機械は稲作用機械に比べて一機種当たりの需要が少ないため、開発はなかなか進みませんでした。

そこで、国は野菜用を中心とした農業機械の開発を加速させるべく、九三年に農業機械化促進法を改正し、国と民間が協力して機械開発を行うことになりました。

同年から始まった「農業機械等緊急開発事業（緊プロ）」では、事業の目玉としてキャベツ収穫機が取り上げられ、生研センター（現在は農研機構 農業技術革新工学研究センター）と小橋工業株式会社の官民による開発が始まり、九



キャベツ収穫機（ヤンマーアグリ株式会社 宮永豊司氏提供）

五年に全自動タイプのキャベツ収穫機が開発されました。しかし、収穫精度や収穫したキャベツのハンドリングなどに問題があり、本格的な販売には至りませんでした。

そ

の後、生研センター、ヤンマー農機株式会社によって改良が加えられ、二〇〇一

年には新型キャベツ収穫機として市販化されましたが、広く普及するには至りませんでした。一方で、消費需要の変化から、加工・業務用野菜

の需要が高まり、実需者からは生産の低コスト化が強く求められるようになりました。そこで、生研センター、ヤンマー株式会社（現在はヤンマーアグリ株式会社）、オサダ農機株式会社がキャベツ収穫機開発の共同研究を開始され、一二年に開発に成功しました。キャベツ収穫機の開発が計画されてから、二〇年もの月日が経っていました。

開発されたキャベツ収穫機は、刈取部で刈り取ったキャベツをベルトで挟んで収穫機後部の調整作業場所に移動させ、そこで、選別・調整を行い、大型コンテナに収納するものです。

キャベツ収穫機の導入により収穫・調整の労力は半減し、また、大型コンテナの採用で出荷経費は三〇%もの削減が可能になりました。現在では、北海道、南九州などの加工・業務用キャベツ産地に急速に導入されつつあります。



Profile

よしおか ひろし
1948年京都府生まれ。弘前大学大学院農学研究科（修士課程）修了後、農林省野菜試験場入省。農林水産技術会議事務局研究調査官、（独）農研機構野菜茶業研究所所長、（社）日本施設園芸協会常務理事などを経て、2012年10月から現職。専門は野菜の栽培生理。農学博士、技術士（農業部門）。

『種子が消えれば あなたも消える 共有か独占か』

西川 芳昭 著



(コモンズ・1,800円 税抜)

「種子」というものを考えてみよう

宇根 豊

(百姓・思想家)

「主要農作物種子法」(以下種子法)とは、国が稲・麦・大豆の奨励品種を選定し、その種子生産を都道府県に委託する根拠法だった。この四月に廃止されると、早速採種業務から撤退する府県が出てきた。困ったことだが、これを機会にじっくり「種子」について考えるときの、最良のテキストがこの本だ。次のような記述で、著者の思索の広さと深さが見てとれる。

「種子法はフォーマルなシステムでありながら、地域の農家が多様な品種を利用できる可能性を守っていた」。同時に、こうも言っている。「種子法には農家の品種を選ぶ権利と能力を奪ってきた面もある」

私が現役の農業改良普及員だった四〇年前には、担当した村の稲の品種は五六だった。現在では五品種である。これは果たしていいことか。

これからは、種子も投資の対象となろうとしている。しかし、世界の種子の九〇％は市場経済に乗っていない。「ローカルな種子システム」の重要性に注目すべきだ。フォーマルな制度とローカルな制度が共存することは簡単なことではない。伝統的な品種は、次々に近代育種で作出された品種に置き換わってきた。

グローバル化が進み、農薬会社のデュポン社とモンサント社がそれぞれ種子企業を買収して、市場の四四％を占めるまでになっている。従来の発想では対抗できないのではないか。

伝統品種を守り、自家採種している農家は、遺伝資源についての「農民の権利」を主張しようとしている。それは「日本においてとりわけ顕著である」と、著者は憂いている。

たしかに私たち百姓は、そういう西欧的な「権利」ではなく、地域の財産として品種を守ってきた。それが時代精神から置き去りにされようとしていることに気づかないのも無理もない。

多くの百姓は種子法の廃止に、危機感を持っていない。種子法の廃止は、農業の競争力強化の一環だそう。種子は生きものであり、食べものの分身であり、自然の一部でもある。商品として、経済的な「競争」の市場に放り出しているものだろうか。日本国では「農業の本質」について、深く考える習慣がないことが議論を妨げている。

わが家の稲は三〇年も自家採種している。元の品種とは大きく変異してしまった。それが愛しいと感じる。種子は風土の中で生きているのだ。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2018年4月1日~4月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農業と経済 臨時増刊号 (2018年4月) 錯綜するEPA/FTA動向と世界の農業・食料政策	農業と経済 編集委員会/編	昭和堂	1,700円
2 週刊ダイヤモンド JAを襲う減反ショック 儲かる農業2018 (2018年2月24日号)	週刊ダイヤモンド/編	ダイヤモンド社	685円
3 今さら訊けない米穀流通業界用語集 (第2版)	米麦日報部/編	食品産業新聞社	1,000円
4 変わる! 農業金融 儲かる“企業化する農業”の仕組み	中里 幸聖/著	日刊工業新聞社	1,600円
5 いま蘇る柳田國男の農政改革	山下 一仁/著	新潮社	1,600円
6 新版 農業がわかると、社会のしくみが見えてくる 高校生からの食と農の経済学入門	生源寺 眞一/著	家の光協会	1,200円
7 農業のマーケティング教科書 食と農のおいしいつなぎかた	岩崎 邦彦/著	日本経済新聞出版社	1,600円
8 攻めの農林水産業のための知財戦略 食の日本ブランドの確立に向けて	農水知財基本テキスト 編集委員会/編	経済産業調査会	4,900円
9 図解 知識ゼロからの現代漁業入門	濱田 武士/監修	家の光協会	1,600円
10 フード・マイレージ 新版 あなたの食が地球を変える	中田 哲也/著	日本評論社	1,800円

日本食市場の動向 in タイランド

― バンコク駐在員レポート ―

タイは、日本産農林水産物・食品の輸出先として大きな可能性がある市場と言えます。

二〇〇八年以降の輸出統計によると、タイは日本産農林水産物・食品の輸出先としてASEAN（東南アジア諸国連合）第一位の座を一六年まで維持していました。一七年はベトナムに逆転されたものの、タイ向け農林水産物・食品の輸出は堅調に増加しており、輸出額は三九一億円で対前年比一八・七％となりました。

さらに、ASEANのハブという立地上の優位性を活かしてタイを拠点に加工・輸出するなど市場拡大の可能性もあります。

私は一七年四月から日本公庫より日本貿易振興機構（ジェトロ）のバンコク事務所に向向し、主に日本産農林水産物・食品のタイ向け輸出支援に関する業務を行っています。具体的には、タイの日本食市場に関する現地情報の提供（市場概況や輸入規制）や日タイ間のビジネ

スマッシング機会の提供（食品展示会でのジャパンパビリオン出展、バンコクでの食品商談会の開催、日本国内商談会へのバイヤー招聘）などです。

今回、二回にわたって日々の業務経験をもとに、タイ国内での日本産食品および日本食に関する現状についてご紹介します。

日本食・文化に高い好感度

日本産食品の輸出先としてのタイの位置付けを把握するために、まずはタイ市場の特徴などについて説明します。タイ市場のポジティブな側面を表すと「親日的で安定した輸出先であり、日本とのヒト・モノ・カネの交流が盛んな国」と言えるでしょう。

日本からの輸出額上位品目は豚の皮（八〇億円）、かつお・まぐろ類（六六億円）、さば（二七億円）などです。豚の皮は皮革製品の原料として、かつお・まぐろなどの魚類は主に缶詰製品の原料として日本から

タイへ輸出されています（皮革製品や缶詰製品はタイで製造されたものが世界各国へ輸出されているため、タイ人が全量を直接消費しているわけではありません）。

また、タイは製造業、非製造業を問わず日系企業の進出が盛んです。ジェトロが一七年に行った「タイ日系企業進出動向調査」によると、現地の活動が確認された日系企業数は五四四社に上ります。

加えて、タイ国民の大多数は親日

的で、日本の文化や芸能に対する好感度が高いです。最近では、日本のアイドルグループAKB48のタイ版であるBNK48の「恋するフォーチュンクッキー」がYouTubeで再生一億回を突破（今年四月時点）するなど人気を博しています。

同様に、タイでは日本食の人気も高く、ジェトロが一四年三月に行った「日本食品に対する海外消費者アンケート調査―バンコク編―」によると、「一番好きな外国料理は



Data

タイ王国 (Kingdom of Thailand)

- 面積…51万4,000平方キロメートル（日本の約1.4倍）
- 首都…バンコク
- 人口…6,572万人（2015年）（タイ国勢調査）
- 民族…大多数がタイ族。その他 華人、マレー族など
- 言語…タイ語
- 宗教…仏教 94%、イスラム教 5%

- 主要産業…農業は就業者の約40%弱を占めるが、GDPでは12%にとどまる。一方、製造業の就業者は約15%だが、GDPの約34%、輸出額の90%弱を占める。
- GDP…4,069億ドル（名目、2016年、国家経済社会開発庁（NESDB））
- 一人当たりGDP…6,033ドル（2016年、NESDB）
外務省HPより（平成29年7月14日）

表 小売店における日本食品の品ぞろえ

店舗分類	主要店	日本食品の品揃え
日系の百貨店、スーパーマーケット	フジスーパー、伊勢丹、Max Valueなど	日本国内のスーパーに見劣りしないほどの豊富な品揃え
現地系の百貨店、高級スーパーマーケット	Gourmet Market, Tops Market, Villa Market など	豊富な品揃え
ハイパーマーケット (郊外、大型)	Big C、Tesco Lotus など	基本的な日本食材、調味料など
コンビニエンスストア	セブンイレブン、Max Value Tanjai、ファミリーマート、Lawson 108など	菓子など限定的
ウェットマーケット (生鮮食品)	ローカル市場	日本産食品は確認できない

出所：市場調査およびヒアリングより作成

食品企業は厳しい競争環境

ここまでタイ市場の良い面を紹介してきましたが、逆にタイ市場の

何か」という質問に対して六六％が日本食と回答しており、日本食の人気の高さがうかがえます。さらに、タイからの訪日観光客数が年間約一〇〇万人(二〇一七年実績。日本政府観光局統計より)まで増加しており、より本格的な日本食を求めるタイ人が増えている状況です。

ネガティブな側面については「国内市場規模の拡大が限られ、食品関係の競争環境が厳しい国」と表現できるとでしょう。

タイは経済発展により中間層が増加しているものの、日本と比較すると経済規模は小さく(名目GDPは日本の八％程度)、貧富の差が大きい国です。

タイ政府の統計によるとタイ人の約九〇％は世帯月収が五万バーツ(約一七万円)以下であり、現地に比べると高価な日本産食品の購買層は限られています。また、日本と同様にタイも急速に少子・高齢化が進展しており、国内市場の大きな拡大は見込めない状況です。

なお、ジェトロ・バンコク事務所が毎年行っているタイ国内の日本食レストラン店舗数調査によると、昨年六月末時点で二七七四の日本食レストランが存在します。この調査では、地方における日本食レストランの出店が順調に増加する一方、バンコクにおける日本食レストランの店舗数が調査開始以降初めて前年を下回る結果となりました。

また、調査期間(二〇一六年七月一日～一七年六月三〇日)におけるタイ全国での新規出店が五〇四にに対し撤退が四四三という結果から、

日本食レストラン間での競争が激化していることが分かります。特に、日本の駐在員が多く住むスクンビット地区には日本食レストランが密集しており、新規オープンした飲食店が一年未満で撤退することもしばしばあります。

食品輸出には市場研究を

小売店における日本産食品の品ぞろえについて、表の通り整理しました。

伊勢丹やフジスーパーといった日系小売店の品ぞろえは日本国内のスーパーと比べても見劣りせず、日本食材を買い求めるのに困ることとはほばない状態です。これら店舗の立地は日本人が多いバンコク都心および日本人居住区に集中しています。

なお、タイは東日本大震災に関連する輸入規制を二〇一五年に撤廃(一部の野生動物肉を除く)しており、既に福島県産のモモなども日系および現地系の小売店で販売されています。

一般的に小売店における日本産食材の価格は日本国内に比べて高価です。例えば、日本で買うと一〇〇円程度の日本産即席麺をタイで買うと一〇〇バーツ(三四〇円)程

度となります。もちろんさまざまな要因(物流コスト、小売店に支払う棚代、販促費用、関税などの税負担)によって小売価格は変化し得るのですが、日本での小売価格(円)をバーツに置き換えることでタイでの小売価格を大まかに見積もることが可能です。

タイに限らず海外への食品輸出を検討するに当たってお勧めしたいのは、実際に現地の小売店に行ってみることです。そこで自社商品の競合となり得る商品の価格、品質、パッケージなどを研究したり、まだ売られていない商品(新たな需要創出の余地)を探ることにより、販路開拓のヒントが得られるのではないのでしょうか。

なお、ジェトロでは海外情報のウェブサイトで掲載や海外コーディネーターとの輸出支援相談をはじめ、さまざまなサービスにより日本産農林水産物・食品の輸出支援をしています。詳しくはジェトロホームページをご覧ください。ジェトロURL: <https://www.jetro.go.jp/>

次号では、日本産食品を売り込むためのポイントを中心にご紹介いたします。

(営業推進部付ジェトロ・バンコク事務所出向 百田 裕樹)

交流会

既成概念を超える 女性経営者の発想力

一〇回目となる農林水産事業交流会「フードネットin北海道」を開催し、講演会では食材付き情報誌『北海道食べる通信』を発行する株式会社グリーンストーリープラス代表取締役社長の林真由氏が登壇。同誌創刊の契機となった「お取り寄せダイニング十勝屋」の経営経験、同誌から生まれた生産者と消費者のコミュニティにおける心温まるエピソードに、参加者からは「生産者と消費者をつなぐ発想と行動力に感動した」との感想が届きました。二月二日、於：札幌市、参加者：公庫のお客さまなど二四〇人

(札幌支店)



「有益な情報交換ができた」と好評

交流会

メロン農家に学ぶ 直販マーケティング

秋田支店が事務局を務める若手農業後継者の交流団体「農Future!!」が、第一六回例会を開催。北海道でメロンを栽培・販売する寺坂農園株式会社代表取締役社長の寺坂祐二氏が、「通販・直販で売り上げを伸ばし続ける！」をテーマに講演。ホームページなどで消費者に直接メロンを販売し、売り上げ一億円を達成した自身の体験に基づき、「顧客とのつながりが重要。顧客が求めるものを理解し、SNSなどで精力的に情報発信を」と訴えました。二月三日、於：秋田市、参加者：秋田県内の若手農業者など八〇人

(秋田支店)



講演後は参加者から熱心な質問が寄せられました

意見交換会

若手農業者の 新たな交流の場に

香川県内の新規就農者が他の就農者や農業関係者などにつながる契機をつくる「かがわニューファーマー塾」を開催。岡山で経営コンサルティングに携わる株式会社えんのした代表取締役の川路隆志氏により、グループワークやディスカッションを交えた形で講演が行われ、若手農業者や農業経営アドバイザーたちの間で活発な意見交換が行われました。同塾は県の今後の農業を担い「もうける経営」の実践者を数多く輩出する場として、今後定期的に開催予定です。二月二七日、於：高松市、参加者：公庫のお客さまなど七六人

(高松支店)



ディスカッションでは意見が活発に飛び交いました

展示会

金融機関が連携し 六次化促進の展示会

六次産業化の促進のため、生産者と加工・小売業者などのマッチングを図る「ちゅうぎん六次産業化セミナー&展示会」は五回目の開催を迎えました。セミナーでは愛媛県の大規模野菜生産者、農事組合法人たいう農園代表理事の本田和也氏が六次化の事例を発表。展示会では設置した二二のブースで多くの商談が行われました。参加者からは「有意義な商談ができた」などの声が寄せられました。三月二三日、於：岡山市、参加者：各機関のお客さま、バイヤーなど約二二〇人、共催：中国銀行、農林中央金庫、日本公庫

(岡山支店)



商談は盛況で、にぎわいに満ちた会場

『事業性評価融資』のご案内

次代を担う農業の担い手が取り組む攻めの経営展開を支援するため、お客さまの「経営者能力」や「経営戦略」を、より積極的に評価する新たな審査スキームとして事業性評価融資を取り扱っています。

* * * * *

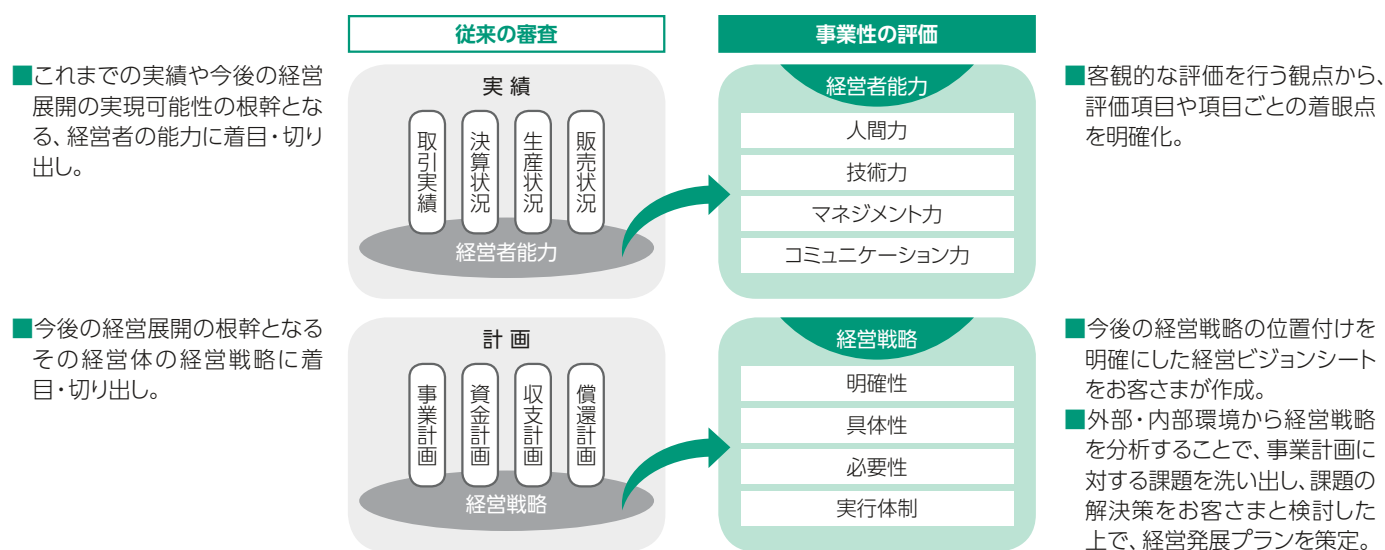
事業性評価融資により、ご自身では気付きにくい経営の強みを活かす方法や弱みの打開策を公庫と一緒に検討し、課題解決のための提案と融資後の濃密なフォローアップを通じて、経営目標の達成に向けて強力にサポートいたします。

事業性評価とは

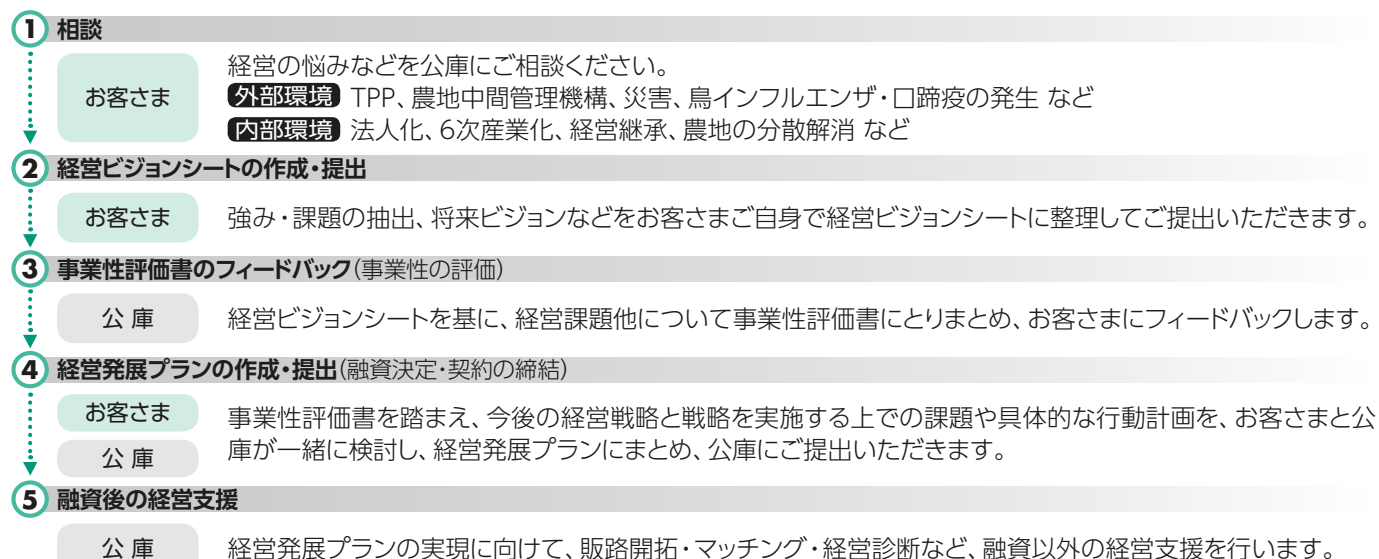
金融機関が現時点での財務データや保証・担保にとらわれず、企業訪問や経営相談などを通じて情報を収集し、事業の内容や成長可能性などを適切に評価することです〔「円滑な資金供給の促進に向けて」(2015年7月金融庁)〕。

事業性評価融資の仕組み

経営者能力(経営実績や今後の経営展開の実現可能性の根幹)と、経営戦略(今後の経営展開の根幹)を切り出して評価します。



事業性評価融資の流れ



ご留意いただきたい事項

- 事業性の評価は通常の審査に加えて実施するもので、事業性の評価結果のみで融資の可否を判断するものではありません。
- 資金ごとに対象者・使途などの要件があります。詳しくは、最寄りの日本公庫支店農林水産事業までお問い合わせください。

みんなの広場

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(https://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

◆『AFCフォーラム』は農業を志す若い人たちにぜひ読んでもらいたい。

四月号の特集には、若い人たちの農林漁業への挑戦が紹介されている。

しかしながら誌面には、正直なところ、堅苦しさも感じる。

僧侶で落語家の露の団姫^{つゆ まるこ}さんのエッセイ「宗教と食の由来」を読んだときには思わず大笑いさせられたが、このような気軽に読める柔らかい記事もどんどん掲載してほしい。

そうすれば、もっと多くの若い人たちが手に取るようになり、読まれるのではないかと思う。

(広島市 内俣)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒100-0004
東京都千代田区大手町一〇九四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三-三三七〇-三三三〇

AFCフォーラム Forum

編集

鳴谷 元 西山 大也 高雄 和彦
柴崎 勇太 城間 綾子 前島 幸子

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル
Tel. 03(3432)2927
Fax. 03(3578)9432
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

定価 514円(税込)

◆ご意見、ご提案をお待ちしております。

◆巻末の児童画は全土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

編集後記

◆二年前まで新規就農を担当しており、参加した就農希望者向けイベントの会場に熱気があふれていたことを思い出しました。空前の売り手市場の今でも農業に関心がある若者は多くいます。その若者も農業の労働条件などに不安を感じているようです。働き手にとって、魅力ある農業へ、雇い手の取り組みに期待しています。(西山)

◆本号の特集テーマは「人材確保」。支店勤務時代にあるお客さまから伺ったのは、作業に繁閑のある農業でも雇用条件は他産業並みとしなければ雇用は確保できない、ということ。納口さんが紹介された事例でそのことを改めて実感しました。

今年度から本誌編集を担当します。皆さまの経営発展に役立つ記事づくりに努めてまいります。(高雄)

◆農業経営者の澤浦さん、岡本さん、赤松さん、小暮さんから電話でお話を伺いました。四人に共通していたことは、素早くて確で打てば響くような受け答えと、最後にねぎらってくれること。第一線で活躍する農業経営者は、ぶれない強い信念を持って経営を実践しており、何よりも周囲への気遣いを忘れないんだと感じました。(城間)

◆今月の「耳よりな話」はキャベツ収穫機の話。実用化が進んだきっかけには、「加工・業務用なら、これまでの段ボール出荷ではなく大型コンテナに収納する方が効率的」という発想の転換があったそう(ヤママーのwebサイトより)。野菜が店頭に並ぶまでの背後に、さまざまな見えないストーリーがあるのだなと感心させられます。(前島)

国産にこだわり 農と食 をつなぎます。

第13回 アグリフードEXPO 東京 2018

—— プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会 ——

日時

8月22^水日/23^木日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東4ホール



日本農業は人手不足時代



『おばあちゃんの家初夏の風景』樽川 礼智 福島県須賀川市立第一小学校

■AFCフォーラム 平成30年6月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻3号(814号)
■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売/株式会社日本経済新聞社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-1-2 第一南校ビル Tel.03(3432)2927 ■定価514円 本体価格476円